

千代紙



言葉としては知っていても、詳しくは知らない日本の伝統文化が結構あるものです。ここでは、誰でも気軽に始められる和文化を紹介していきます。今回のテーマは、千代紙。眺めて楽しく、使ってもまた楽しい。色鮮やかな千代紙の世界を紐解いてみましょう。

錦絵と同じ手法で作られる千代紙

千代紙とは、和紙にいろいろな模様を木版で色刷りした紙のこと。その発祥時期は定かではありませんが、京都の公家文化から生まれたことは確かかなようです。

公家たちは、上質な和紙に、肉筆で模様を描いたり、吹きほかしを施したり、木版で模様を刷り込んだりした模様紙を、進物の上掛け紙や小物の包み紙などに使っていました。そうした風習が江戸時代、大奥や大名家に伝わり、江戸でも千代紙が売られるようになります。

当初、京都から江戸へ移入されていた千代紙ですが、明和2（1765）年ごろ、錦絵（木版多色刷り

の浮世絵版画）が創始され、その技術が発達すると、錦絵の版元が同じ手法を用いて千代紙も刷るようになり、一気に庶民の間に広まります。浮世絵師たちも競って千代紙の下絵を描いたことから、江戸名物として地方への土産物になるなど、「本家」を追い越す人気を博したのです。

なぜ「千代」なのか？

「千代紙」という言葉が確認できる最初の文献は、宝暦7（1757）年刊の『童学要門 実語教童子教』です。ところで、この「千代」とは何を示しているのでしょうか？

その由来については、もともとの千代紙の模様には

は鶴亀や松竹梅などめでたい柄が多く、長い年月を意味する「千代」というめでたい言葉が使われたという説や、千代田城（江戸城の通称）の大奥で使われていたからとする説、この紙を好んで使った宮家の千代姫の名から取ったとする説など、諸説があります。しかし本当のところはどうなのかは、残念ながらまだ分かっていません。

京千代紙と江戸千代紙

京都で始まり、江戸で発展した千代紙には、現在でも「京千代紙」と「江戸千代紙」の二つの流れがあります。双方の大きな違いは図柄です。

京千代紙は、もともとは染織物のモチーフである

千代紙を使って簡単小物作りに挑戦

箸袋

②4.5cmのところを折る。

①15×15cmの千代紙を、中心から0.5cm左のところで折る。

③開いて、丸印のところで下方方向に折ったら、次に手順1で折り筋を付けた三角印のところで折る。

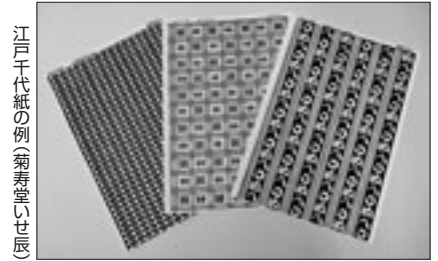
④丸印のところで後ろへ折る。

⑤手順4で折り込んだ面を正面にし、点線の位置でそれぞれを後ろへ折れば完成。

お料理に華を添えてくれる千代紙の箸袋。簡単なので急なお客様にも便利です。



京千代紙の例(さくら井屋)



江戸千代紙の例(菊寿堂いせ辰)

ポチ袋

②中央の折り筋と重なったところを折る。

①15×15cmの千代紙を、図のように折り筋を付けた後、4.5cmのところを中心に折る。

③隣の角も同じように中央に向けて折り、折り筋と重なったところを折る。

④その隣の角も同じように中央に向けて折り、折り筋と重なったところを折る。

⑤最後の角も手順4と同様に折る。

かわいらしいポチ袋は、ちょっとしたお祝いや心付けのときに重宝します。

⑥一番最初に折った部分を少し持ちあげ、紙幣を入れたら、最後に折った星印の部分を先に入れてから開じる。

【参考資料】
 『千代紙集成』ふたば書房
 『千代紙・型染紙』保育社
 『NHK美の壺 千代紙』日本放送出版協会
 『暮らしに役立つ折り紙ブック』(雄鶏社)

千代紙を使う楽しさ

和紙できてきている千代紙は、美しいだけでなく、軽

草花を基調としたものが中心で、後に貴族の伝統的な模様(有職文様^{ゆうしき})や、京都の風土・行事にちなんだ模様も増えていきました。
 これに対し、江戸千代紙は、江戸の風土に根ざした模様が多く、歌舞伎などの芝居を元に作られた、歌舞伎十八番、隈取り、役者紋^{やくしやごもん}づくしなども多く見られます。

くて丈夫。そのため、江戸時代の着せ替え人形である「姉様人形」や小物入れ、書物の装丁など、さまざまなものに使われてきました。現在では、関東大地震や第二次世界大戦によって多くの木版が失われたことや近代的な印刷技術の登場によって、機械刷りの千代紙が主流となっていますが、木版印刷のものも少量ながら健在です。
 ちょっとした小物やラッピングなどに用いることで、日常に彩りを添えてくれる千代紙。用途によって木版印刷りと機械刷りとを使い分けながら、折ったり、切ったり、貼ったりして、思い思いに千代紙を楽しんでみてはいかがでしょうか。